

芸術教育と舞踊教育

— 三浦ヒロの思想と実践 —

安村 清美

1. はじめに

三浦ヒロ¹⁾に関しては、先行研究²⁾によってその経歴、独自の教育思想を形成するに至った芦田恵之助の影響と関連、さらに禅的思想の教育への導入等、詳しく述べられている。

本研究は、上述の研究を踏まえながら、より三浦の舞踊あるいは舞踊教育への考えを詳細に扱いたいと考えるものであり、三浦の人物研究というよりは、むしろ三浦の舞踊＝ダンス観とその実践を通して何を教育しようとしていたかを明らかにしたいという視点に立つものである。

昭和前期における舞踊教育界にあっては、東京女子高等師範学校教授（大正15年～昭和10年）として、約10年在職し、続いて私学の教師となつてからも旺盛な研究心と真摯な態度での教育実践を通して自己の理想への接近を図る。戦時体制にむかう中で、当時の体育界に三浦の理念と実践は必ずしも容易に受け入れられたとは解されないが、この間の著書だけでも9冊にのぼる。これらの著書から得られる三浦の舞踊教育思想と実践に関する手懸りは、昭和前期における日本のダンスと体育の流れを傍証するものであり、現在の我々にとっても舞踊と教育を考えるにあたって、新たな示唆を与えていると思われる。

2. 舞踊知識と発言

三浦の舞踊に関する思想と実践を形成してゆく前提として、彼女がどのような舞踊知識を吸収し、それをいかに咀嚼して自己の見解としたかを以下考察してゆく。

<舞踊の根源的性質>

舞踊教育に関して、初めて論的内容が含まれる著書「行進遊戯」では、「ダンスの起源」、「ダンスの其の後の推移」、「ダンスの効果」、「ダンスの分類」³⁾と項目を立て論述している。ここでは、

『思想感情の発表機関としてのダンス』として『身振、手真似、顔色の変化といったような身体運動が人類の意志並びに感情の唯一の発表機関であった』⁴⁾と言ひ、運動そこに内包される感情との関連に着目する。また『生活力の過剰により発生したダンス』⁵⁾では、非常な喜びにあった場合の内なる充満した力の表現等は、人類のみならず動物にも見出せるものであるとしている。さらに『宇宙と人間のリズム運動から見たダンス』として、宇宙を一つのリズムをもった運動体と捉え、『…宇宙といふ大なる有機体の一部であるところの我々人間は、其の運動を常に宇宙と共に流してゆかなければならない関係にある』⁶⁾とし、宇宙の諸現象及び人類の生活に運動とリズムの共通性を認め、両者のリズム運動の間に必ず何等かの一致があるはずであると結論づけている。

このように、舞踊の發生的本質を、コミュニケーションの媒体であり、かつ、動物の本能に根ざしたものであることを述べ、さらに宇宙—自然界の運動とリズムについても言及し、ここに包含される人類の根源としてダンス体である我々の存在を位置づけようとしている。

<歴史的知識とその効果>

三浦は、舞踊を歴史的に把握し、それを単なる事実としてではなく、歴史的に見出せる人物の行動や思想が我々に与える影響—三浦の言をかりれば「効果、一を掘り下げようとしている。

例えば、近代についてみると、舞踊及び教育関連人物として、ダンカン、ディアギレフ、ニジンスキー、ダルクローズ、ラバン等を挙げ、それぞれについて、独特の舞踊の種類・目的・効果を述べている。即ち、ダンカンであれば、古典的ダンスであり、ギリシャ思想に回帰し、『魂の復活によって潑瀾たる再生の喜びを見る』⁷⁾ダンスであると述べ、ダルクローズについては、ユリスミ

1) 経歴については、末尾 附1 参照

2) 高橋美栄子「昭和初期における我が国学校ダンスに関する考察 — 三浦ヒロのダンス論を中心に —」体育学研究2（北海道支部）1966、国枝たか子『近代日本女性体育史』「ダンスによる児童中心主義の実践 — 三浦ヒロ」日本体育社、1981、等

3) 著書No.3 P. 33～P. 94

4) 同 上 P. 34

5) 同 上 P. 36

6) 同 上 P. 39

7) 同 上 P. 71

ックス — 音楽的立場から身体運動を研究し、『美的情操の陶冶』⁸⁾に資するダンスであるという。

つまり、三浦は、古代エジプトの舞踊から近代のモダン・ダンスまでの舞踊の歴史を通覧しながら、その本質的価値を読みとろうとしている — 舞踊の多目的性とそれぞれの価値 — 姿勢をもち、限定されない舞踊の拡がりを認めていると考えられる。

<感情の純化・美的感情 — 舞踊の創作>

「女性體育とダンス」では、舞踊の創作的価値に着目し、他芸術や芸術家・哲学者たちの論を引用しながら、“芸術の創作せられるまで、“芸術作品の鑑賞、“ダンスの生命としての美的感情⁹⁾について論述している。

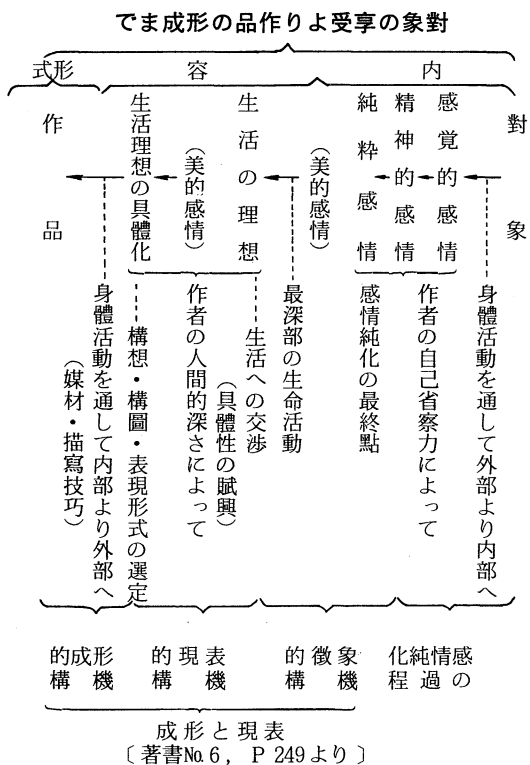
次表は、その著書に三浦がまとめ掲載されているものである。ここに見られるように、まず作者が『対象の享受によって内面に生じたところの

一つの感情を、幾多の労作を通して理想的な感情に洗練統一したものを¹⁰⁾を“感情の純化、と呼び、『感情の純化は、芸術がその内容として、美的感情をもたなければならない』¹¹⁾と述べ、創作の出発点を明記し、『単なる直観によって得たのみの感情を内容としては、芸術は成立しない』と追記して、感覚的感情と美的感情の差異を明らかにしている。さらに、この両者間を継ぐ作者は、『感情を「意識している我」が、「感ずる我」と二つに分立せられてをりますので、「生命の深層から溢れ出る力」を呼びおこす』¹²⁾ために『強力な内省の力によって、作者の生活理想の中に融化せしめる』¹³⁾ことで『芸術が真の芸術たる』ものであるという。そして、この感情純化の労作に続いて、芸術的具体性のための『内なるものの外面化、客観化』¹⁴⁾としての表現・形成について述べている。

表現については、『内面的な心的活動を外部的、客観的なものに表すはたらき』ではあるが、『日常の生活に現れる表現は、或は無意識的な行為であり、無目的な活動である場合が多く……芸術活動としての表現は、あくまで意志的の労作であり、意識上の問題であり、目的的な行動でなければならない』¹⁵⁾と、日常と芸術上の表現を区別している。ここでの表現活動では、『内面に純化せられた感情と、現実生活との交渉』¹⁶⁾が重要であり、表現の内容は、『现实生活を理想的に止揚するところの生活感覚』でなければならないと結論している。

表現内容の決定に続いて形式の選定があり、この形成については、『一定の媒材によって、素材となるところのものを何等かの具体的形式に固定せしめる一つのはたらき』¹⁷⁾であるとし、『表現は常に形成によって完了せられるものであり、形成は表現を内包したところのものである』¹⁸⁾と述べ、その不可分性を説く。ここに於いては、“媒材、が重要な意味を持ち、『ダンスの創作に際しては、身体運動の持つ魅力を十分に理会し、あらゆる運動の内容に精通している必要がある』と素材の特殊性にも言及している。

以上のように、芸術の創作過程を明らかにしながらも、最終的に作品を決定するものは、『作者の人間の深さ』であり、『これが最後に作品の上



8) 著書No.3 P.83

9) 著書No.6 P.233~P.273

10) 11) 同 上 P.233

12) 同 上 P.236

13) 同 上 P.237

14) 同 上 P.238

15) 16) 同 上 P.240 (ここにおける表現とは、現代の芸術学における“表出、— 内的なものを外化する原理的作用 — の意味に解すると理解できる。)

17) 同 上 P.243

18) 同 上 P.244

に滲み出て、いわゆる個性を形成する』¹⁹⁾と述べる。

ここに見られる「感情の純化、や「美的感情、は、創作に関しての論述ではあるが、後に考察する舞踊の教育的目的や価値においても強調されている事項であり、これは、三浦が教育の中に創作を持ち込まなかったにもかかわらず、舞踊ひいては芸術教育の基本的価値の認識があったことを証明するものであろう。

3. 『行進遊戯』について

<定義と目的>

三浦の行進遊戯に関する定義と目的についての記述を抽出し、著書別に比較すると〔表1〕のようになる。

定義については、昭和5年発行の「行進遊戯」では、まず、ダンスを、荒木直範、波井二夫、高橋キヤウと当代の著名なダンス研究者及び教育者の分類と、学校体操教授要目（大正2年、大正15年）の分類を挙げ、名称と内容の不一致を指摘しつつ、自らの分類を明らかにしている。つまり、『ダンスのすべての種類に涉って最も体育的に効果のあるもの』²⁰⁾と定義する。昭和7年には、『ダンスはもともと我々の感情を身体運動を通して表現しようとする芸術』²¹⁾と、その本質を認めながらも、体育科の中に存する行進遊戯という限定の中で、『芸術的基調に立った時、ダンスは体育材料ではありません。……体育的效果を以て第一義的条件とします。』²²⁾と、前著と同様な見解に立つ。しかし、昭和12年には、『行進遊戯とは体育的效果の顕著なダンスを一括したところの特殊な名称』と述べ、これは前二著と変わらないものの、さらに『行進遊戯は又、一の芸術作品であると見ている。』²³⁾と述べ、ダンスの芸術性及び内容を基幹としたものになっている。

これは、その目的の変化を見れば一層明らかになる。つまり、昭和5年には、目的を身体的、精神的方面に二分し、精神的方面に関しては、ほぼ要目解説と同様な見解を示し、行進遊戯が他の体操種目と異なる点を強調している。昭和7年には、ダンスの特性を一步進めて、精神的方面では、『快

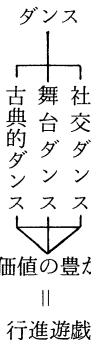
活な精神を養ふのはいふに及ばず、美的情操の発達を助長し、感情の純化に資す等、ダンス特有の感情の陶冶が行はれます』²⁴⁾と、この後の三浦の本領を予感させる発言をしている。さらに、昭和12年になると、この言を一層深め、『美的感情を運動練習を通して体認することにより、……行為を通しての自己把握の好機が恵まれ得る』²⁵⁾と述べ、要目に表われた「人格の陶冶」の表現を、三浦が芸術とみなした行進遊戯の内容から合目的化した方向へ引用しようとする姿勢が読みとれる。
<行進遊戯材料 — 内容の検討>

上述のような行進遊戯観に立つ三浦は、その材料や内容についても、それぞれの著書で詳細に解説している。材料選定の前提として、『材料配当に際しましては、まづ、其の時代に於ける一般児童の心身両面の発育状態を知らなければなりません。』²⁶⁾に代表されるように、発達（心身）、環境、材料の多岐にわたる検討、熟慮の重要さを説く。この前提をもって、材料の類別を試み、先述した定義と目的の変移にそって、昭和7年には、『行進遊戯の体育的效果に立脚した類別』²⁷⁾として、1. 身体各部の運動 2. 快活な気分 3. 身体運動の美的表現のそれぞれを目的とするものを挙げている。昭和12年には、『人間形成²⁸⁾ということを目標として進む体育陶冶材としての類別』と分類基準の変化もみられ、これを、1. 生活感情を内容とするもの 2. 美的感情を内容とするもの 3. 表現形成修練の材料に分ける。この分類に含まれる作品には、年代を越えて同じもの（例えば、「汽車」、「ワルソヴィナ」等）が見られ、同一作品でありながら、教育目標の重点に変化があることが見出せる。

さらに、教授要目に表れた各学年の材料を分析的に考慮した上で、『運動の部分が非常に下肢に偏している……又、運動の内容から考えてみましても類似のものが多く、多方面から材料を採って来たものとは思われません』²⁹⁾と、欠落点を指摘し、これを補い、かつ感情の涵養を促すものとして、一方に遍しない材料を補充材料として挙げている。
〔表2〕

19) 著書No.6 P. 248
20) 著書No.3 P. 104
21) 著書No.4(上)P. 6
22) 同 上 P. 12
23) 著書No.7 P. 133
24) 著書No.4(上)P. 7
25) 同 上 P. 35
26) 著書No.7 P. 133
27) 著書No.4(上)P. 16
28) 著書No.7 P. 132
29) 著書No.3 P. 134, 135

著書別にみる行進遊戯の定義と目的〔表1〕

<p>著書名</p>	<p>「行進遊戯」 (S. 5. 5)</p>	<p>「小学校に於ける行進遊戯 材料と其指導」 (S. 7. 1)</p>	<p>「女学校の唱歌遊戯・ 行進遊戯」 (S. 12. 3)</p>				
<p>定義</p>	<p>「……行進遊戯即ち、体育的のダンスと考へたいと思ひます。そして、この体育的ダンスといふものの範囲を、単にフォークダンスやアスレチックダンスに限らずダンスのすべての種類に涉って最も体育的に効果あるものを含んだものにしたいと思ふ。」</p> <div style="text-align: center;">  <p>ダンス</p> <p>古典的ダンス 舞臺ダンス 社交ダンス</p> <p>↓</p> <p>体育的価値の豊かなもの</p> <p> </p> <p>行進遊戯</p> </div>	<p>「最も顕著なものは、感情の涵養であります。これは、<u>ダンスはもと我々の感情を、身体運動を通して表現しようとする芸術</u>なのでありますから、この方面に対して、最も多大の効果のあるのはいふまでもありません。」「<u>快活な精神を養ふのはいふに及ばず、美的情操の発達を助長し、感情の純化に資する等、ダンス特有の感情の陶冶が行はれます。</u>」</p> <p>「行進遊戯は体育材料です。ダンスは芸術的作品です。<u>芸術的基調に立った時、ダンスは体育材料では決してありません。</u>しかし乍ら体育的方便物として、ダンスを適用する時に於ては、<u>其の体育的効果を以て第一義的条件とします。</u>」</p>	<p>「行進遊戯とは、体育的効果の顕著なダンスを一括したところの特殊な名称であると考えてをりますので、<u>行進遊戯は又一の芸術作品であると見ているのであります。</u>従って、他のあらゆる芸術作品がさうであると同様に、行進遊戯の内容となっているところのものも原則としては、<u>所謂美的感情と呼ばれている一種の感情でなければならない。</u>」</p>				
<p>目的</p>	<table border="0"> <tr> <td style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">身体的方面</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 1. 身体を均斉に発達させる事 2. 健康な身体を養成する事 ③ 身体の美的表現 ④ リズムの修練 </td> </tr> <tr> <td style="border-top: 1px dashed black; writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">精神的方面</td> <td style="border-top: 1px dashed black;"> <ul style="list-style-type: none"> 1. 身体美に対する理解力と鑑賞力とを養ふ 2. 内省力を養ひ思想・感情を高尚優美にすること 3. 爽快明確な精神を養ふ 4. 工夫創造の力を養ふ </td> </tr> </table>	身体的方面	<ul style="list-style-type: none"> 1. 身体を均斉に発達させる事 2. 健康な身体を養成する事 ③ 身体の美的表現 ④ リズムの修練 	精神的方面	<ul style="list-style-type: none"> 1. 身体美に対する理解力と鑑賞力とを養ふ 2. 内省力を養ひ思想・感情を高尚優美にすること 3. 爽快明確な精神を養ふ 4. 工夫創造の力を養ふ 	<ul style="list-style-type: none"> 1. 健康な身体の獲得 2. 均斉な発達の助長 3. 優美な姿態の養成 4. 端正典雅な動作の涵養 <p>①感情の涵養 — 最も顕著なもの</p> <p>2. 意志の鍛練 — 女性的意志の… (内剛にして外柔)</p> <p>3. 知識の取得</p>	<p>身体運動を通しての女子の性情陶冶心の覚醒を以った肉體運動</p> <p>「身体運動の各面に表現せられてゐるこの美的感情を運動練習を通して体認する事により、一面には理想的な感情生活の中に具体的な<u>自己の姿を見</u>、又他面には<u>運動それ自身への、没我的</u>参加によって、自己と行為との一如の境地を展開し得て、ここにも亦、行為を通しての<u>自己把握の好機が</u>恵まれ得る。」</p>
身体的方面	<ul style="list-style-type: none"> 1. 身体を均斉に発達させる事 2. 健康な身体を養成する事 ③ 身体の美的表現 ④ リズムの修練 						
精神的方面	<ul style="list-style-type: none"> 1. 身体美に対する理解力と鑑賞力とを養ふ 2. 内省力を養ひ思想・感情を高尚優美にすること 3. 爽快明確な精神を養ふ 4. 工夫創造の力を養ふ 						

「行進遊戯材料」の分析〔表2〕

学年	運動材料	運動内容	運動の部分	練習目的	備考
一・二	大工さん	児童の日常生活に表れる動作を体育化し劇化したもの	殆んど身体各部 軀幹・上肢・下肢の普遍的練習	創作的心境の培養に資する点の多い材料	「身体運動としても理想的であり、思想的にも一貫した点があつて」 「動作は小大工さんが櫓に造るべき木をかついで仕事場にゆくところから始ります。櫓を造つてあの雪の坂道や小山を滑つて遊ぼうという希望にうごかされた小大工さんの活躍ぶり」
一・二	汽車	子供時代の興味のあるものの頂点である汽車の模倣	下肢・上肢の各部	共同一致の動作修練 駈歩、上肢の運動	「電車、汽車、自動車、馬車、こういったものに非常に興味を有して居る子供は随分あります。それ故に大人の想像も及ばぬ程微細な点に迄観察を試みて居るものです。」
三・四	お休みなさい	体の表情が困難ぐったりした筋肉の表す表情、又は眠りにおちた体の力の抜け具合	体の力を抜く練習	体筋肉精神ともに緊張と弛緩	「静かな曲である。如何にも倦い動作である。入梅時の午後幾分汗ばんだ体に疲れを覚える頃にしてみると心にくい程眠気を催す筈である。」
三・四	チルドレンスポルカ	ポルカのやさしいもの	身体各部	快活な気分と軽快な動作	フォークダンス
五・六	ワルソヴィナ	かなり複雑な歩法 (マズルカ・ワルツ) (三段に分れたダンス)	下肢	快活な気分	スウィデンのフォークダンス 「ストックホルムのスカンセンといふ公園では大晦日の夜を通して踊るのだとききましたが本当にスウィデンの人々も豊かにダンスを持った人達であります。」
五・六	夢	動作は極静かであつて全身的の努力を要する。曲と動作とから題の夢が浮んで来るやうに	下肢・上肢	静かに曲一ぱいに動作をする練習	「曲は子守唄です。子守唄に連関して夢といふ感じがすぐに浮んでまいります。題は曲から来た連想です。」

(著者No.3及びNo.4に共通の材料から対象別に二作品づつを選んだ。尚、分析の基準は、著書No.3 P 134 135にならった。)

生徒・聴講生の感想文に表れた指導作品の内容〔表3〕

作品 項目	作品「ロシアの少女」 (著書 No. 9 より) N=4															
美的 感情	<ul style="list-style-type: none"> ・何となく体一杯幸福になったやうな気がしました。 ・このダンスをしている時、よく味はってそれを完全に自分のものにした時、それはうれしく明るく幸福になったやうな気がする。 ・何といふ<u>喜びに溢れたダンス</u>であらうと思った。 ・このロシアの娘を踊っている時程、私は喜びを感じた事はない。 ・こんなにまで幸福な気持ちになった事はない。 ・何故かは分らないが、これを踊っていると自然喜びに満たされて了ふのだ。 ・そんなに心から喜んで楽しく踊った事はなかったのだ。 ・名前から素適だと思ったが、曲を聞いた時、私の心は喜びで一杯だった。 															
感情 移入	<ul style="list-style-type: none"> ・ロシアの娘の貧しくも粗末ながら袖の大きなスカートのふくらんだその洋服を考へてうれしくてうれしくて仕様がありません。 ・お稽古をしている時には、ロシアの娘が袖のヒラヒラした裾の大きく拡がる綺麗な洋服を着て踊っているのが目の前に浮かんで来る様であった。 ・最後の時間、私はブルマーと半袖の運動服で十分少女の気持を汲む事が出来た。 ・自分がロシアの娘になった様にとっても楽しく、又嬉しく感じた。 															
生活 理想	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな小さな粗末なものでも、素直に受け容れれば世の中に悲しい事は一つもない。 ・このダンスは本当に深い意味のこもった喜ばしいダンス ・このロシアの娘の様に心から感謝する事が出来る様な気持ちにさせられる。 ・ロシアの娘を学んで、こんなに人生を歩み行く者に必要な事を私共は知る事が出来た。 ・大切な条件は踊る人各自の心だと知った。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 5%; text-align: center;">1</td> <td style="width: 65%;">袖のふくよかさに見とれて (幸福)</td> <td rowspan="7" style="width: 30%; vertical-align: middle; text-align: center;"> { 著者No.7より 三浦が分析した内容と 感情 } </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">2</td> <td>うれしさの躍り (強い 元気)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">3</td> <td>スカートをふくらませて (幸福)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">4</td> <td>うれしさの躍り (強い 元気)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">5</td> <td>うれしさに胸を抱いて (幸福) ……頂点……^{o o o o}表現は静か</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">6</td> <td>うれしさの躍り (強い なめらか) まごころ……自己をみる……感謝</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">7</td> <td>感謝 (幸福の極致は神への感謝)</td> </tr> </table> </div>	1	袖のふくよかさに見とれて (幸福)	{ 著者No.7より 三浦が分析した内容と 感情 }	2	うれしさの躍り (強い 元気)	3	スカートをふくらませて (幸福)	4	うれしさの躍り (強い 元気)	5	うれしさに胸を抱いて (幸福) ……頂点…… ^{o o o o} 表現は静か	6	うれしさの躍り (強い なめらか) まごころ……自己をみる……感謝	7	感謝 (幸福の極致は神への感謝)
1	袖のふくよかさに見とれて (幸福)	{ 著者No.7より 三浦が分析した内容と 感情 }														
2	うれしさの躍り (強い 元気)															
3	スカートをふくらませて (幸福)															
4	うれしさの躍り (強い 元気)															
5	うれしさに胸を抱いて (幸福) ……頂点…… ^{o o o o} 表現は静か															
6	うれしさの躍り (強い なめらか) まごころ……自己をみる……感謝															
7	感謝 (幸福の極致は神への感謝)															
指導の 要点 (三浦)	<p>「たしかにロシアの少女の学習は、毎時間感激の中につづられていったと思ふ。それはこのダンスの内容に、生徒たちの生活に非常に接近したものがあり、そしてその中に、人間生活の理想とするものを指示せられているからであると思った。」</p> <p>「ロシアの少女 — 心の素直な人は、あらゆる所に幸福を見出し感謝をもつ」</p>															

4. 舞踊と教育 — 理想の実現

以上のような三浦の舞踊 — 行進遊戯を、どのような理想をもって教育していたのかを、以下に、その教育観・体育観と合わせて考えてゆきたい。

まず、先行研究で指摘されているように、三浦の教師時代全般を貫ぬかれ、底流をなす芦田恵之助の“共流、思想は、いずれの著書にも見られ、『教師と児童と共に流れるといふこの考へは、実に深重なる意味に於ての児童教育でなければなりません』³⁰⁾勿論教授の主体は、生徒・児童であって教師ではないのですけれど……教授に於ける教師と児童は主従の関係にあるものではなくて、対等の位置におかれたものであります。』³¹⁾と、生徒は当然の事、教師にこそ、敬虔さと熱心さをもって前進する心構えが必要であると理想を語る。

さらに、『人間生活の最高理想とは、いふまでもなく完成せられた人間を意味するものであり、……我々教育の理想が常に之を語っていたにもかかわらず、事実は全くこの点を忘却していたのであります。』³²⁾と、教育における理想に対する体育の欠如点 — 身体の教育に遍し、内面を軽視している — を攻撃し、この“忘却していた事、を実践するために『私は先づ最初の仕事として、考へる体操指導をはじめてみました。……勿論こゝでいふ考へるとは知的な思考を意味するのではなく、実は運動の中に現れた「自己のあり方」を考へることだった。』³³⁾と述べ、自己の教育の方向を明らかにしている。

体育に関しては、『最も理想的な体育材料とは、外見に表れた動的・静的の区別や、運度量の多寡を以てのみ規定せられるものではなく、如何に被教育者の生命的要求に合致し、この事によって、如何に真実な霊肉一致の境地が誘導せられるかによって規定せられねばならない』³⁴⁾と、内的生命に訴える体育を切望し、『競技は競技の本質を遺憾なく発揮し、ダンスはダンスの生命を十分に発揮し、体操は体操の本領を守ってこそ、はじめて完全なる体育の完成が実現せられ得る』³⁵⁾と、体育における教育は、個々の種目の本質を抽出し、これを見据えた上で、教育全体の理想 — 共流 — との合一を目指していることが理解できる。

〔表3〕は、三浦のダンス指導に対する感想文を、作品別に内容により、“美的感情”、“感情移

入”、“生活理想”の項目に分類したものの一部である。この作品「ロシヤの少女」において、三浦は、『心の素直な人は、あらゆる所に幸福を見出し感謝をもつ』という生活理想を最終的な教育目標とし、生徒の側は、『これを踊っている的自然喜びに満たされて了ふ』『ロシヤの娘が……綺麗な洋服を着て踊っているのが目の前に浮かんで来る様』『心から感謝する事が出来る様な気持ち』といふ流れ — 三浦の言によれば、『本当に美的感情を内容とするものが、此の生命的な点にふかく立入って指導せられたとき、それは必ず常にその実演者のまことの心によびかけ……自己の生活理想を高め……』³⁶⁾ — を受け取っているものである。

これは、前に考察したように、三浦が舞踊の教育において理想とする〈感情の純化 — 美的感情〉の論や、行進遊戯の定義・目的を実践によって果たし得たとみる一つの証しとなろう。

しかしながら、ここで言う“美的感情”とは、あくまで指導された作品の実演者の追体験の範囲によるもの（『この美的感情を追体験するといふことによって、そこに実演者の最高至純な感情を展開せしめ、この心境の中に、自己の本質を把握せしめんとすることが、ダンス指導の第一着眼とならねば』³⁷⁾）であり、教材を離れない方向での教育的芸術体験であることは認識されるべきであろう。

5. 総括

三浦が舞踊 — 行進遊戯を教えていた、女高師時代から青山学院時代を通覧すると、教育に対する基本的な信念に変化はないものの、体育 — 特に行進遊戯観が変容していく様が見とれる。初期には、舞踊の本質的部分をおさえながらも、学校体操教授要目の指針に合わせていこうとする — 身体的効果の重視 — が、指導の実践と生徒の反応を重ねながら、最終的には、舞踊の芸術性の追体験に着眼した目標 — 『ダンスが体育材料として意義を有するのは、身体運動を通して、情的方面の訓練に当ることである。従って体育の材料である限り、最も身体的効果の多いものを選ばなければならないにしても、あくまで其の最終目標とすべき所は、感情の陶冶でなければならない』³⁸⁾

30) 著書No.3 P.358

31) 同 上 P.360

32) 著書No.6 P.49

33) 同 上 P.63

34) 同 上 P.190

35) 同 上 P.289

36) 著書No.9

37) 同 上 P.279

38) 著者No.6 P.293

— へ到達したとみられる。この限界は、『陰気な感じのものや寂しいもの悲しいもの等は、児童教育には不向きです。……芸術として用いられた場合には人生のすべての方面を象徴したものでなければなりません、行進遊戯として採るものは明るい一面で十分です。』³⁹⁾に代表されるように、人格陶冶としての教育理念に貫ぬかれた感情の陶冶、つまり、感情の範囲を限定していることと考えられる。

当時の教育界全体の思想の底流 — 大正期以来の、芸術教育と新教育思想の発生と高まり — を考える時、児童・生徒との「共流」を目指す中で、「教材の教授」という形態をとりつつ、あくまで追体験の範囲で芸術教育を把えていることは、先に挙げた限界はみられるものの、芸術の本質に立脚しながら、それを教育の場で応用するという発想を見せている。

以上に加えて、先に述べてきたように、舞踊や教育の構造を分析的に把握する視点をもちつつ、自己の論を展開していく聡明さは驚嘆に値するものであり、教育→体育→舞踊の方向をもつ思想と実践の中に、人格陶冶としての教育理念と舞踊教育との連関を明らかにしたことは、その期の舞踊・教育の覚醒であったと思われる。

最後に、本論文の作成にあたり、御指導・御助言いただいた、お茶の水女子大学松本千代栄先生に心よりの感謝とともに、この稿を終わりたい。

附1 — 三浦ヒロの略歴⁴⁰⁾

- 1898年(明治31年10月28日)北海道札幌市に生まれる。
- 1916年(大正5年4月) 東京女子高等師範学校文科入学。
- 1920年(" 9年3月) 同校卒業。附属小学校訓導となる。
- 1923年(" 12年10月) 文部省在外研究員としてヨーロッパ留学(体操研究のため)
- 1926年(" 15年2月) 帰国
(" 4月) 東京女子高等師範学校に奉職。
- 1932年(昭和7年) 丸子小学校で実践

- 1935年(" 10年3月) 東京女子高等師範学校退職。
- (" 9月) 青山学院女子部講師となる。
- 1936年(" 11年4月) 同校体育科専任となる。「研究学級」開始。
- 1941年(" 16年3月) 聖心女学院初等科専任教師となる。
- (" 7月) 青山学院退職。
- 1942年(" 17年4月) 聖心女学院限職。
- 1947年(" 22年6月) 静岡市立長田南中学校教諭となる。
- 1956年(" 30年) 同校退職。私塾を開く。

附2 — 三浦ヒロの著書

1. 「歐洲の體育を見て」 蘆田書店パンフレット第三編 T15. 10
2. 「コドモノ遊ビ」 日本体育学会 S. 3. 9
3. 「行進遊戯」 一成社学校教育文庫第4巻 S. 5. 5
4. 「小学校に於ける行進遊戯材料と其指導法」 目黒書店 (上) S. 7. 1 (下) S. 7. 10
5. 「女子體育より見たる行進遊戯」 建文館師範大学講座 體育13 S. 11. 5
6. 「女性體育とダンス」 東洋図書 S. 11. 11
7. 「女學校の唱歌遊戯・行進遊戯」 成美堂書店 S. 12. 3
8. 「真実の體育を求めて」 同志同行社 S. 13. 4
9. 「女教師の手記」 教育科学社 S. 18. 8
10. 「低学年の體育指導」 第一教育出版社 S. 23. 7
11. 「四十二本の矢」 西濃印制 S. 54. 10

39) 著者No. 3 P. 162

40) 作成にあたり国枝和子「三浦ヒロの體育観」お茶の水女子大学卒業論文 昭和43年および「近代日本女性体育史年表」日本体育社 昭和56年を参考とした。